

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和5年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1	前年度 評価結果の概要	・本年度も続けて、コロナ対応に苦慮した。2回の学校評価アンケートを実施した結果を見ると、中間評価後の取り組みに改善が図られ、それぞれの成果目標の達成に努めることができた。職員間での情報共有は昨年同様できたので、全職員がチームとして取り組む意識がさらに高まっている。 ・本年度はコロナ禍がやや縮小し、学校行事等も工夫して実施された。生徒の活躍の場は幾分制限されたが、昨年よりその場面が多く見られた。来年度も時期や内容を工夫して、できる限りの行事を実施したい。生徒たちが学習や行事に生き生きと取り組む姿が見られるように、職員間の意思疎通も図りながら教育活動に取り組みたい。
2	学校教育目標	『誇りを持ち、自ら考え、行動する生徒の育成』 ～「やる気・根気・負けん気」の醸成を通して～ (校訓「清水精神」)○形を正す ○挨拶をする ○負けじ魂を持つ ○物を大切にす ○思いやりの心をもつ)
3	本年度の重点目標	(1) 分かる授業の構築と確かな学力の向上 (2) 生徒指導の充実(先手必勝) (3) 心の教育の推進 (4) 家庭や地域、小学校との連携

4 重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
(1)共通評価項目											
評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価			
	取組内容	成果指標(数値目標)		進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	○単元・授業のねらいを生徒と共有しながら授業を展開する ○繰り返し学習による基礎基本の定着 ○「主体的で、対話的な深い学び」の指導方法の工夫 ○家庭学習の充実	○「授業のねらいや流れを理解して学習に取り組んだ」と回答する生徒の割合70%以上 ○「話し合う活動を通して、考えを深めたり、広げたりすることができた」と回答する生徒70%以上 ○「平日の家庭学習の時間が2時間以上」の生徒50%以上	・単元を単位とした「めあて」と「まとめ」のある1時間完結型授業の実施 ・単元テストの活用と「主体的・対話的な深い学び」につながる教材・授業展開の工夫 ・AIDノート(伊万里中版生活・学習ノート)の活用を通じた学習「量」の確保と「質」の向上	B	・「授業のねらいや流れを理解して学習に取り組んだか」に対し、肯定的な回答をした生徒は84%であった。また、「話し合う活動を通して、考えを深めたり、広げたりすることができた」と回答した生徒は89%であった。 ・平日の家庭学習が2時間以上の生徒が14%と低く、家庭学習の在り方について改善する必要がある。	B	・「授業のねらいや流れを理解して学習に取り組んだか」に対し、肯定的な回答をした生徒は87%であった。また、「話し合う活動を通して、考えを深めたり、広げたりすることができた」と回答した生徒は93%であった。 ・平日の家庭学習が2時間以上の生徒は9%と低い。基礎学力を向上させ、学びに向かう姿勢を育成する必要がある。	B	・来年度は校内研究の取り組みを通して基礎学力の向上を目指す。 ・「平日の家庭学習の時間が2時間以上」の生徒50%の目標に対し、9%の実績という結果に留まったことは残念である。評価指標を、2時間という時間を目標とするのか、学力の向上(中間・期末の平均点)などに変更するの検討してはどうか。	学力向上コーディネーター 各教科主任	
●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳の授業を通して、自分の意見を周りに伝えたり、他者の考えを受け入れて自分自身を見つめ直したりする生徒70%以上	・ワークシートを工夫し、振り返りの時間を十分に確保することで自分の考えを整理させる	A	・「自分の意見を周りに伝えたり、他者の考えを受け入れて自分自身を見つめ直すことができる」と回答した生徒は89%であった。 ・それぞれの学年で工夫された道徳授業を行っており、今後も継続する。	A	・「自分の意見を周りに伝えたり、他者の考えを受け入れて自分自身を見つめ直すことができる」と回答した生徒は91%であった。 ・各学年の実情に応じて教材を選択するなど充実した道徳教育を行うことができた。	A	・人権作文や標語など生徒が取り組んだ作品を掲示、紹介できた。また、多くの授業実践が行えた。 ・TT且つローテーションでの授業は、教諭間での学びが多く、負担も軽減されている。	道徳教育推進担当 人権・同和教育担当 学年主任・担任	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について組織的対応ができていますと回答した教員80%以上	・いじめの寛知・認知に対する対応マニュアルの作成・見直しを行う ・いじめ対応に関する研修会の実施 ・アンケート「心のとびら」の実施 ・教育相談部会との連携	A	・「いじめ防止等について組織的な対応ができています」と肯定的に回答した職員は96%であった。引き続き全職員で生徒の観察や情報収集、情報交換を密に行う。	A	・「いじめ防止等について組織的な対応ができています」と肯定的に回答した職員は98%であった。今後も全職員で生徒の観察や情報収集、交換、生徒指導を行う。	A	・学校生活の中で把握し得るもに関しては、早期発見と対応ができる体制ができています。また、いじめ発覚後は学校、生徒、保護者の三者による面談、学年集会や学活、道徳を取り扱うなど、再発防止に向けての対応ができています。また、SSW、SC、家見北、北部見相等との連携もできており心強い。	生徒指導主事 学年主任	
●健康・体づくり	●生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒70%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした生徒80%以上	・生徒の出番の確保と自浄作用の支援(主体的な生徒会活動の推進) ・キャリア教育の充実	B	・「先生はよいところを認めてくれる」と回答した生徒は84%であった。また、「将来の夢や目標をもっている」と回答した生徒は51%であった。「分からないと答えた生徒も多く(30%)、具体的なキャリア教育を行う必要がある。	B	・「先生はよいところを認めてくれる」と回答した生徒は86%であった。 ・「将来の夢や目標をもっている」と回答した生徒は52%であった。また、「分からないと答えた生徒も32%と多く、来年度のキャリア教育の見直しが必要である。	B	・生徒の主体性を重んじる教育活動が増えている。特に1年生で実施したENAGEEDを使った総合学習では、自分の意見を他の生徒から好意的に評価されることで自己肯定感を高めることができていた。また、生徒会活動も生徒が主体となって司会や運営などをし、活躍する場が増えている。	進路指導主事 総合的な学習担当	
	◎『清水精神』(校訓)の指導徹底と善悪の判断・自律心の育成	○『清水精神』を心がけて学校生活を送っている」と回答する生徒80%以上	・生徒会と連携して校則の見直しを行うことで、自己有用感と遵法精神高揚を図る ・掲示物や放送等で、生徒の善行などを知らせる	A	・「清水精神を心がけている」「まあ心がけている」と回答した生徒は87%であった。 ・生徒会活動等を通して、自治の力の向上を図る。	A	・「清水精神を心がけている」「まあ心がけている」と回答した生徒は82%であった。 ・新生徒会となり、活発に活動を行っている。さらなる自治の力の向上を目指す。	A	・校則の見直しをよい機会ととらえ、学級での話し合いや総会での意見発表など自己有用感を体験できる場をより多く設定し、伊万里中学校の自治に積極的に参加できる生徒を育成したい。	生徒指導主事 各学年生徒指導担当	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に良い食事をしている」生徒85%以上 ○朝食を毎朝とっている生徒80%以上を目指す	・給食週間を設定する ・栄養教諭による講話等の取組を行う ・生徒会活動を通して啓発を図る ・学級活動や家庭科の授業に朝食の大切さについての学習を仕組む	A	・健康に良い食事をしていると回答した生徒は91%、毎朝(ほぼ)朝食をとっていると回答した生徒は85%であった。 ・客観的に自分の食生活を振り返ることができるような食育指導を行う必要がある。	A	・健康に良い食事をしていると回答した生徒は93%、毎朝(ほぼ)朝食をとっていると回答した生徒は92%であった。朝食を摂ってくる生徒は多いので、次の段階として朝食の内容等についても指導を行っていく。	A	・1学年はどのクラスも残菜がなく、よく食べる生徒が多かった。また、食に対する関心も高く、講演会を開いた際は、自分事として聞くことができていた。しかし、学年によっては残菜や残乳が多いところもあったため、更に学校全体として指導していく必要も感じた。	食育教育担当 保健主事	
	○心身の健康増進のための啓発と推進	○病気や感染症への対策を意識して実践している生徒85%以上を目指す ○運動習慣のある生徒70%以上を目指す	・生徒や保護者に通信等での啓発を行う ・部活動による心身の健全育成を行う	A	・感染症対策を意識している生徒は86%、運動習慣がある生徒は85%であった。 ・心とからだの両面の健康増進を図り、授業や部活動の指導を行う。	A	・感染症対策を意識している生徒は85%、運動習慣がある生徒は90%であった。 ・思春期特有の心身が不安定になっている生徒へのサポートを充実させていく。	A	・感染症対策への意識が高く、その成果で感染症の流行拡大がみられなかった。屋外でも遊んでいる生徒が多く活気がある。 ・心因的なサポートはSCやSSWと連携を図り今後もサポートをしていきたいと考えている。	保健主事	
●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する	・担任任せにせず、学年集団で学年経営を行う組織づくり ・部活動複数顧問制度の活用	B	・「月々の時間外在校時間が45時間以内である」「おおむね45時間以内である」と答えた職員は43%であった。業務内容の見直しや取捨選択を進める必要がある。	B	・「月々の時間外在校時間が45時間以内である」「おおむね45時間以内である」と答えた職員は56%であった。本年度後半は各職員が業務の効率化を心がけていた。	B	・月45時間を超えないように、具体的な取り組み内容が有効に機能したのか振り返りをしたうえで、次年度の取り組みにつなげる必要がある。	管理職	
	○行事、学級・学年事務、校務分掌事務等の精選、簡略化	○週1回の企画委員会を通し、各学年・分掌から業務改善につながる意見を集約する	・教育校務システム(SEI-NET)の利活用促進 ・アプリやICT支援ソフトを用いた効率化を図る	A	・学年や校務分掌の連携がとれており、グループワークが進んでいると肯定的に感じている職員は82%であった。同学年、他学年、級外の連携をさらに進める必要がある。	A	・学年や校務分掌の連携がとれており、グループワークが進んでいると肯定的に感じている職員は82%であった。総合的な学習の計画立案・実施について改善の必要あり。	A	・学年や校務分掌との連携がとれていることが高く評価できる。必要に応じてITツールの活用を行うことで削減できた時間を教員間のコミュニケーションに充ててほしい。	管理職 教務主任	
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目											
評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
	取組内容	成果指標(数値目標)		進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言		
○家庭や地域、小学校との連携	○小中連携教育の充実 ○保護者や地域への学校情報の積極的な発信 ○コミュニティスクールを核とした学校と地域の連携・協働	○「学校は地域や保護者と協力して教育活動を行っている」と回答する地域の方・保護者80%以上 ○「開かれた学校づくり取り組んでいる」と回答する保護者80%以上	・学校運営協議会(コミュニティスクール)の運営を各校と協力して行う ・学校だよりを地域に配布し、開かれた学校を心がける ・学校HPを随時更新し、学校安心メールを積極的に活用する	A	・「地域や保護者と協力して教育活動を行っている」と肯定的に回答した保護者84%、「開かれた学校づくりに取り組んでいる」と肯定的に回答した保護者82%であった。今後も保護者や地域と連絡を密にし、連携を図っていく。	A	・「地域や保護者と協力して教育活動を行っている」と肯定的に回答した保護者82%、「開かれた学校づくりに取り組んでいる」と肯定的に回答した保護者84%であった。3年生で実施したPTA主催職業講話が大変好評であった。	A	・今年度初めて実施した伊万里中学校関係者による3年生向けの職業講話は学校・PTA・地域と一体となり運営できた。今後も生徒の夢やキャリア教育につながるよう発展させていく。	教頭 主幹教諭	
○特別支援教育の充実	○特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する意識や専門性の向上、90%以上	・会議や研修で、共通理解と情報共有を図る ・授業実践を通して情報交換、指導方法の研究をする	B	・特別支援教育に関して、意識や専門性の向上に努めている教員は83%であった。今後も職員研修や特別支援会議を通して研鑽を深めていく。	B	・特別支援教育に関して、意識や専門性の向上に努めている教員は82%であった。今後も多様化やインクルーシブ教育に関する研修を進めていく。	B	・生徒一人一人の特性に応じた支援を行うことで、良い変化があった。月に一度の校内支援委員会により、共通理解を図ることで、特性をもった生徒への対応が早かった。教職員への研修会などを通してさらに研鑽を深めていく必要がある。	特別支援教育 コーディネーター 教育相談担当	
●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育											
5	総合評価・ 次年度への展望	・「めあて」を提示し、「まとめ」を行う授業スタイルが確立しており、教員、生徒共に同じ認識のもとに進めることができた。来年度は基礎学力を向上をさせることで、「学びに向かう姿勢」、「主体的に学ぶ態度」の向上を図る。 ・感染症の影響もあり、十分なキャリア教育を行うことができなかった。各教科のキャリア教育の計画を見直し、生徒が将来についての展望がもてるような内容を実施していく。 ・各学年主任を中心にして学年部会を有効活用し、総合的な学習、特別活動、道徳、生徒指導等が効率よく行えるようにし、職員のグループワークを進める。 ・業務の精選、効率化を推進し、時間外在校時間の削減を図る。									